



昭和館は、戦没者遺族をはじめとする国民が経験した戦中・戦後(昭和10年頃から昭和30年代まで)の国民生活上の労苦についての歴史的資料・情報を収集、保存、展示し、後世代の人々にその労苦を知る機会を提供する施設です。平成11年3月に開館し、一般財団法人日本遺族会が厚生労働省から委託を受け、その運営にあたっています。



〒102-0074 東京都千代田区九段南1-6-1
TEL 03-3222-2577 <https://www.showakan.go.jp>



昭和館

巡回特別企画展

くらしにみる

昭和の時代 宮城展

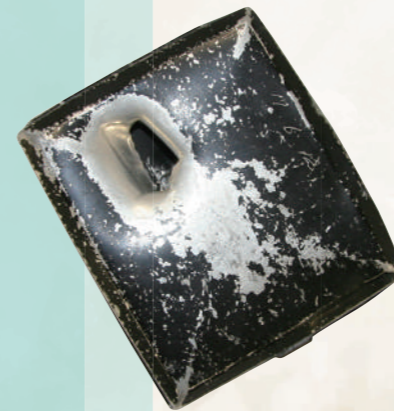
◀瓦礫の中から物を探す母子・仙台市 昭和20年(1945)9月18日 米国国立公文書館提供



しょうけい館は、戦傷病者とそのご家族等が戦中・戦後に体験したさまざまな労苦についての証言・歴史的資料・書籍・情報を収集、保存、展示し、後世代の人々にその労苦を知る機会を提供する国立の施設です。



しょうけい館は10月に移転のため、
詳しい内容につきましてはホームページをご覧ください。
TEL 03-3234-7821 <https://www.shokeikan.go.jp>



▲銃弾により穴が空いた煙草入れ

しょうけい館(戦傷病者史料館)

戦傷病者の
労苦を伝える

宮城展



平和祈念展示資料館は、さきの大戦における兵士、戦後強制抑留者(シベリア抑留者)、海外からの引揚者の労苦を広く知っていただくための施設です。

平和祈念展示資料館(総務省委託)

〒163-0233 東京都新宿区西新宿2-6-1 新宿住友ビル33階
TEL 03-5323-8709 <https://www.heiwakinen.go.jp>

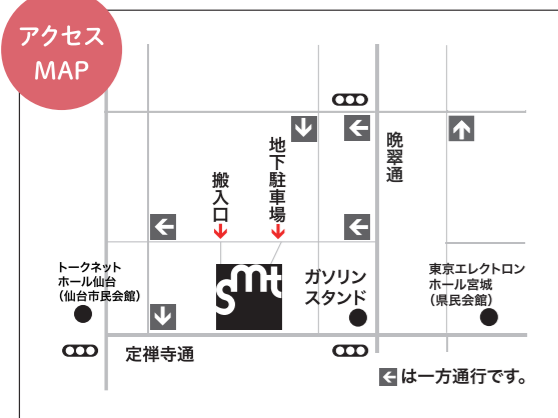


▲横尾淳(冬の収容所) ※宮城県出身の抑留体験画家

平和祈念展示資料館

平和祈念展 in 仙台

シベリア抑留
終わらなかつた戦争



- 地下鉄をご利用の場合**
 - 南北線勾当台公園駅下車、「公園2」出口から徒歩6分
 - 東西線大町西公園駅下車、「東1」出口または「西1」出口から徒歩13分
 - 東西線青葉通一番町駅下車、「北1」出口から徒歩15分
- バスをご利用の場合**
 - 仙台市営バス 仙台駅前60番(仙台TRビル前、地下鉄仙台駅「中央2」出口前)のりばから「定禅寺通市役所前」経由「交通局大学病院」行き(系統番号がリまたはXで始まるバス)で約10分、メディアテーク前下車
- お車をご利用の場合**
 - 東北自動車道仙台宮城ICから約10分
- 駐車場**
 - 利用料金: 1時間まで 200円 / 2時間まで 400円 以降30分ごとに150円
 - 駐車可能台数: 64台 高さ制限: 2.3mまで

昭和館・しょうけい館・平和祈念展示資料館

合同
巡回展

入場無料

令和5年
(2023年)

12/9 土 → 12/19 火

時間 午前10時～午後6時

会場 せんだいメディアテーク 5階ギャラリー3300(宮城県仙台市青葉区春日町2-1)

主催: 昭和館、しょうけい館、平和祈念展示資料館 協力: 一般財団法人宮城県連合遺族会および一般財団法人日本遺族会第1ブロック
後援: 宮城県 宮城県教育委員会 仙台市 仙台市教育委員会 河北新報社 朝日新聞社仙台総局 共同通信社仙台支社 時事通信社仙台支社 毎日新聞仙台支局 読売新聞東北総局 産経新聞仙台支局 NHK 仙台放送局 tbc東北放送 仙台放送 テレビ 三キテレビ khb 東日本放送 Peta.fm エフエム仙台

昭和館

巡回特別企画展

くらしにみる
昭和の時代
宮城展

昭和館は、戦中・戦後に国民が経験した労苦を後世に伝えるため、昭和10年代から昭和30年代までの歴史的資料を収集、保存、展示する施設です。

実物資料を活用した展覧会を全国各地で開催してほしいという要望をうけて、平成13年(2001)から巡回特別企画展を実施してきました。令和5年度は、宮城県仙台市において巡回特別企画展「くらしにみる昭和の時代 宮城展」を開催する運びとなりました。

本展では戦争がもたらした苦難や昭和の人々のくらしぶりを、戦中・戦後の宮城県に関連する実物資料や写真を交えて紹介します。



▲通信箋
宮城県仙台市に縁故疎開した児童のもの。昭和20年7月10日の仙台空襲により防空壕の中へ避難させていた生活用品は被害にあったが、通信箋は焼失を逃れた。
昭和18年度



▲「昭和24年宮城県の回顧すくろく」
宮城県における昭和24年の出来事を扱った双六。知事選や条例公布などの事柄がマスに選ばれ、あがりにあたる昭和25年には講和条約締結への期待が窺える一文が記されている。
昭和25年(1950)

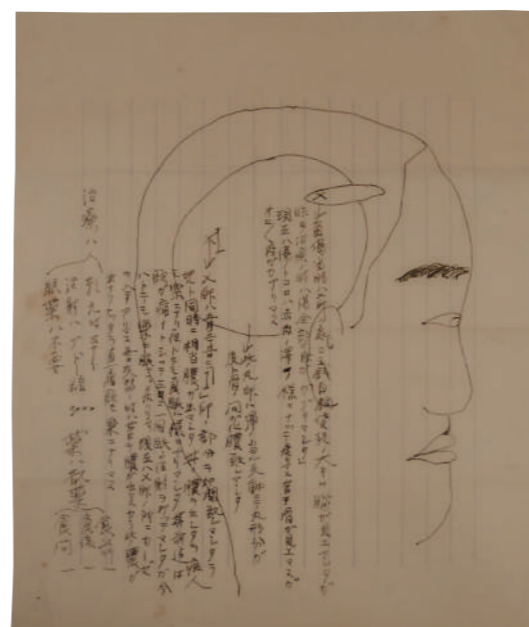
しょうけい館(戦傷病者史料館)

戦傷病者の労苦を伝える宮城展

先の大戦で怪我をしたり、病気になったりした人のことを戦傷病者と言います。彼らは、戦争が終わってもその怪我や病気がもとで生活を送るのに多くの労苦がありました。

戦場では銃弾や砲弾の破片などにさらされるだけでなく、病気や栄養失調にかかることも多くありました。中には、やむを得ず身体の一部を切断しなければならなくなった兵士たちもいました。こうした兵士には、義手や義足などが支給されましたが、生活や仕事のあらゆる面で不自由を強いられることとなりました。戦争が終わってからその傷や病が治ることはなく、傷病を抱えながら生活を送りました。

本展では、戦傷病者が体験した戦中・戦後の労苦をご贈りいただいた資料をもとに紹介します。



▲怪我の様子を記した軍事郵便



▲摘出弾

▲お守り
御守 日蓮荒山神社

▲義眼

▲義足 (歩行時に使用)

▲義手(作業時に使用)

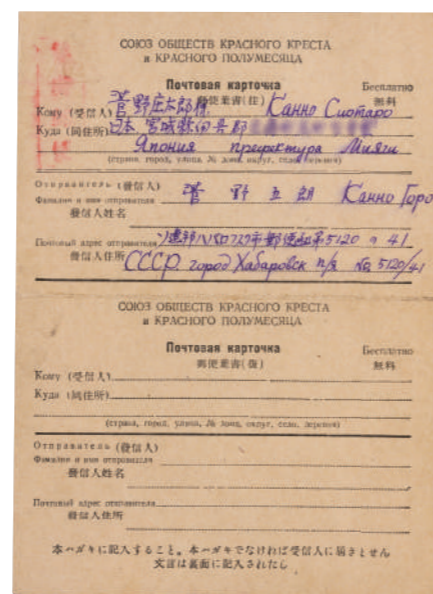
平和祈念展示資料館

平和祈念展 in 仙台

シベリア抑留
終わらなかった戦争

戦争が終結したにもかかわらず、シベリアをはじめとする旧ソ連やモンゴルの酷寒の地に連行され、重労働や飢餓に苦しめられた戦後強制抑留者は約57万5千人に及びます。そのうち、約5万5千人が栄養失調や伝染病などで命を落としました。

本展では、抑留者がシベリア抑留中にラーゲリ(収容所)で使用していたモノや、帰国後に記憶をたぐり寄せて描いた絵画を通して、終戦後も続いた彼らの労苦を伝えます。



▲宮城県出身の抑留者がラーゲリから家族に宛てて書いた俘虜用郵便葉書



▲飢えに耐えかねて袖の部分をパンと交換した防寒外套



▲川口光治<坑内切羽>



▲日本での食事を夢見て作った食器類



▲佐藤清<埋葬前のたき火>



▲日々の慰めのために作った麻雀牌